



〈R03152061〉

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～8ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 記述解答用紙記入上の注意
 - (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
 - (2) 所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 - (3) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。
 - (4) 解答用紙は折り線のところから山折りにしてから解答すること。
 - (5) 字数指定のある問いに答える場合は、句読点などの記号も字数に含めるものとする。
 - (6) 字はすべて丁寧に書くこと。
- 5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。
- 6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 8 この問題冊子は持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私たちが生きる現代社会は近代化を経て成立した。この近代化の歩みは、社会が宗教から解放される過程でもあった。簡単に言えば、このプロセスこそが世俗化である。「社会の大多数が超越的存在を信じていた状況」から「社会の大多数が超越的存在を信じなくなる状況」への移行が生じたのだ。

ここで、現代社会¹とかつての社会（前近代社会）のあり方を比較してみよう。前近代社会においては、宗教ははるかに大きな存在感と影響力を持っていたことが分かる。

たとえば、ヨーロッパの多くの国はキリスト教を国教としていた。そこでは、王の権力や権威も教会の承認を得ることと成立する。教育や医療も、教会学校や教会立の福祉施設が担っていた。現在でもヨーロッパの町を旅すれば、たいいていその中心に教会が建てられていることが分かるだろう。一日のリズムは、教会の鐘によって管理された。毎週日曜の礼拝は単なる宗教儀礼ではなく、その参加者が教会を中心とするコミュニティの一員であることを確認する機能も持っていたのである。

日本では、江戸時代初期に、主にキリスト教の禁止を目的として寺請制度^{てうけいど}が敷かれた。これは現代の檀家制度^{だんか}に続く日本独特の仏教制度である。事実上、仏教を国の宗教と定め、寺にコミュニティの管理を委嘱する施策であった。その下では、寺が民衆の管理監視を行い、役所や警察の機能も果たしていたのである。

宗教が支配的な社会を生きる人々は、宗教の枠組みを通じて世界を体験していた。キリスト教世界では、生誕時に受ける洗礼は人間として承認を得ることであり、教会を中心とするコミュニティへの参加儀礼でもある。死ぬ際には、聖職者による儀式が行われなければ、天国には行けないと信じられていた。

前近代社会において、教会は文字通り社会の中心に位置し、すみずみまで影響力を及ぼしていた。もちろん、何から何まで宗教一辺倒の世界だったわけではないだろう。だが、法律は宗教的な倫理や規範の影響下にあり、宗教にとって代わる強力な世界観や価値観が他にあるわけではなかった。宗教が天蓋のように社会全体を覆っていたのである。

こうした宗教の支配や存在感が崩れるのが世俗化である。私たちが暮らす社会を思い浮かべれば分かるように、世俗化が進んだ社会では生活のさまざまな局面で、合理的に考え、ふるまうことが求められる。結婚や葬式のような個人的に重大な出来事も、宗教的な儀礼や手続きだけでは済まされない。近代的なシステムの代表である役所で所定の手続きを行わなければ、それらが社会的に承認されることはないのである。

さらに細かい局面においても同様である。二台の車が交差点にさしかかった場合、青信号の方の車が、他者への思いやりから赤信号の車に道を譲るのは単なる危険行為であり、法的な処罰の対象になる。宗教が説く美德や倫理ではなく、合理的な法律にしたがうことが求められるわけである。そして、生活の隅々まで浸透した合理性に身を委ねているうちに、生活全体が宗教と切り離されてきたのである。

宗教の存在が自明視された前近代社会では、人々は物理的にだけでなく、文化的・倫理的にも同じコミュニティに所属している感覚を持っていた。かつてのフランスのように、カトリックが国教とされ、国民のほとんどがカトリック教徒であった社会を想定してみよう。

そこでは、倫理的な葛藤や問題が生じた時の判断、人間関係の築き方、社会的慣習などについて、「だいたいの人が自分と同じ基準や価値観を持っている」というバクゼン^aとした安心感が存在していたはずである。もちろん、その時代の誰もがカトリックの教義を詳細に学んでいたわけではない。だが、成長の過程で、カトリック的な価値観や慣習をほとんどの人が身につけてはいたのである。

これに対して、宗教を前提としていない世俗化社会は、支配的な価値観や文化がない社会である。最低限のルールを定める法律を除けば、ある人がどのような倫理や規範に基づいてふるまうのかが不明瞭な社会である。殺人のような行為の善悪についての議論はそれほど必要ないかもしれない。だが、たとえば尊厳死・人工妊娠中絶・同性婚・臓器移植・麻薬使用など、倫理や価値観が関わる問題について、誰がどのようなスタンスをとるのかは自明ではない。

さらに言えば、殺人が法的に罰せられることは明らかでも、倫理的にどの程度悪であるかについて、他者がどのような感じているかは不明なのである。世俗化社会では、他者が自分と同じような世界観を共有していることを確信できなくなり、共同体意識や仲間意識といった共同性が掘り崩されるのである。

世俗化によって特定の宗教が公的な地位を失い、それによって価値観や世界観は多様化する。その結果、人々の間に

は物理的という以外に同じコミュニティに所属する感覚を作り出すことが難しくなる。そうした社会では、宗教が社会全体の方向性を決めることはない。むしろ政治や教育といった公的な領域から徐々に排除される。それでは、宗教は社会の中でどのように位置づけられるかというと、個々人がプライベートに関わる対象になる。これが宗教の私事化と呼ばれる状況である。

宗教の私事化は、大きく分けて二つの状況を指している。一つは、宗教が公的な世界の中心に位置づけられ、社会全体の世界観・価値観を支配していた前近代的な状況から、私的な領域に囲い込まれていくことを意味している。世俗化の結果、宗教が社会的に占める位置が社会から個人へとシフトするのである。

もう一つは、私的な領域に囲い込まれた宗教が、元々の歴史や教義とは無関係に、個々人が特定の要素だけを選びとったり、他の宗教と組み合わせるための材料になることを指している。つまり、自己流にカスタマイズされた私的な信仰が増えていくのである。

前近代においては、その社会で支配的な宗教が主張する価値観や世界観をほとんどの人が共有していた。社会全体が共有する倫理や規範が存在し、人々の考え方は、おおむねそれにしたがっていた。それに対して、特定宗教の共有がなくなった世俗化社会では、宗教は人々が個人的にふるまう上で参考にするために、その時々任意に選んで購入する商品のようになる。

宗教教団は、自分たちの教義を体系的に信者に伝えようとする。教義の一部だけを信じたり、さらにはそれを他宗教の一部とユウゴウすることは基本的に認めない。宗教の教義や儀礼は一つの「詰合せ」としてワンセットで提示されていた。それをバラして一部だけを購入するようなことは想定されていなかった。だが、現代では、個々人の需要に応じて宗教の一部が切り売りされることは珍しくなくなっている。

現代の聖地巡礼は私事化の影響を大きく受ける領域である。伝統的に、聖地は宗教制度や教団によって管理されてきた。聖地には、そこがなぜ特別なかを語る物語が付随している。宗教制度や教団は、どのような物語を付随させるのかを決めることで、聖地のあり方をコントロールしてきたのである。神社や寺にはそれぞれ由緒があり、どのような経緯でその場所に神仏が祀られるようになったのかが示されている。

聖地は、その場を管理する宗教集団の神話や伝承と結びつくがゆえに、特別な場所であった。聖地の意味や位置づけは、宗教集団が公認した物語によって決まってきたのである。しかし、私事化が進む社会では、宗教集団が掲げる物語は、その場所にまつわる数ある物語の一つになってしまう。宗教集団に属さず、伝統的な信仰を持たない個々人が、さまざまな物語を聖地に持ち込むからである。

現代の訪問者は、テレビや雑誌を通じて雑多な宗教的情報を獲得し、その中から自分の好みのものを選んで組み合わせる。こうした傾向は、伝統的な信仰心を持つ人々からみれば奇異なものに感じられる。だが、メディアの拡充によって、意識的であれ無意識的であれ、私的な信仰は広まりつつある。従来、そうした人々は不真面目な巡礼者や観光客として重視されてこなかった。さらに言えば、聖地の空気を乱すノイズのように考えられてきたのである。

しかし、世俗化と私事化を経た現代の聖地巡礼を考えるためには、彼らの新しい実践も包み込めるような視座を作らなければならない。新しい訪問者たちの増加によって聖地のあり方は変化しているからである。さらに、伝統的な信仰を持つ人々と新しい聖地訪問者が互いに影響を与えあうような状況も見られるのである。

多くの教団や宗教制度が伝統的な信仰の形を守り続けようとする一方で、個々人は従来の宗教のあり方だけでは満足せず、自らの趣味嗜好に合わせて新しい宗教的イメージや実践を作り出そうとする。その結果、聖地巡礼の世界では、聖なるものが観光のコンテンツとして取り込まれたり、宗教が観光の制度やシステムを利用して新たな形に生まれ変わっているのである。

（岡本亮輔『聖地巡礼』より・一部改）

問一 傍線部a～cのカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えよ。

問二 傍線部1「現代社会」は、前近代社会と対比して、どのような社会であるとされているか。それが端的に述べられている部分を本文中から十五字で探し、その始めの五字を答えよ。

問三 傍線部2「世俗化が進んだ社会」の特徴を次のように説明するとして、その空欄に入る言葉を本文中から三字で抜き出して答えよ。

生活のあらゆる場面で が重視されるようになった社会。

問四 傍線部3「文化的・倫理的にも同じコミュニティに所属している感覚」がより端的に表現されている部分を本文中から十字で探し、その始めの五字を答えよ。

問五 傍線部4「宗教の私事化」の説明として適切でないものを次の中から二つ選び、記号で答えよ。

- ア 宗教の教義の一部分だけが切り取られる。
- イ 宗教の教義が体系的に信者に伝えられる。
- ウ 自己流にカスタマイズされた信仰が増える。
- エ 宗教が個人的な行動を決める上で参照される。
- オ 個人が宗教団体への帰属感を持つようになる。

問六 傍線部5のような現象が現代において広まっている、その社会的背景として挙げられているものは何か。本文中から七字で抜き出して答えよ。

問七 傍線部6「社会全体が共有する倫理や規範」とあるが、現代社会においてその代替となっているものは何か。本文中から一語で抜き出して答えよ。

問八 傍線部7のように考えられてきたのはなぜか。次のように答えるとき、その空欄に入る言葉を本文中から十五字以上二十字以内で探し、その始めの五字を答えよ。

そうした人々は、 。

問九 傍線部8「伝統的な信仰の形」は現代の新しい信仰の形とどのような点で異なっているか。その説明として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 聖地が公認された神話や伝承によって聖化されているという点で異なっている。
- イ 聖地のあり方が宗教制度や教団によって長く保守されている点で異なっている。
- ウ 宗教の教義と儀礼が一体のものとしてパッケージ化されている点で異なっている。
- エ 聖地に付随する聖地巡礼という実践が巡礼者によって行われている点で異なっている。
- オ 聖地が特別な場所である理由は特定の物語によって定められている点で異なっている。

問十 本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 近代社会において、社会全体が私事化し、世界観が多様化するにつれて、公的地位を失った宗教の世俗化が進行していった。
- イ 現代社会において、個々人は自らの趣味や好みに合わせて、新しい宗教的イメージや聖地巡礼の形を作り出そうとしている。
- ウ 日本の前近代社会において、仏教寺院は宗教的な役割だけでなく、民衆を管理し監督するという社会的機能も果たしていた。
- エ 宗教が社会全体を覆っていた時代には、宗教儀礼に参加することはコミュニティの一員であることを確認する意味を持っていた。
- オ 近代社会では、個々人の倫理観や価値観によって、何が犯罪に当たり、何が犯罪に当たらないかという判断が異なるようになった。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

それがなくては共同体が立ちゆかない公的資源のことを、経済学の用語では「社会的共通資本」と言います。社会的共通資本には三種類のものがあります。

一つは自然資源です。大気、海洋、河川、湖沼、森林、^aドジョウ。そういうものは「それなしでは人間が生きていけないもの」です。こういうものは誰も私物化すべきではありません。

第二は社会的インフラです。道路、上下水道、通信網、電気、ガスといったライフライン。これもまた、それなしでは人間が暮らしてゆけない資産であり、かつ私有することが許されないものです。

第三が制度資本です。行政、司法、医療、教育。そういった社会制度もまた、共同体の存立に不可欠であり、かつ個人が私有してはならないものです。

この三種類の社会的共通資本は、専門家によってクールかつリアルな専門的知見に基づいて管理運営されなければならない。私念や私欲が介在してはならない。当たり前のことです。ですから、社会的共通資本の管理運営には、政治イデオロギーと市場経済は関与してはならないとされます。

蛇口をひねると水が出る、スイッチを押すと電気が点く、時刻表通りに電車が来る、一一〇番をまわすとおまわりさんが駆けつける、学校に行くと先生が教壇に立って教科を教える、病院に担ぎ込まれるとすぐ救急医療が受けられる。そういう仕組みは、政権交代や株価変動に連動して変化するものであってはならない。だから、社会的共通資本の管理運営に政治と市場はかわつてはならない。これが制度論の常識だと僕は思います。

でも、この「常識」がもう通らない。¹それはこれらの社会的共通資本は「誰のものでもない」という前提を受け付けていない人たちが増えてきたからです。増えてきたところか、もう過半を制したかもしれません。

「それがないと共同体が保たない資源」は、「みんなのもの」「誰の私物でもない」のだから、その資源については、共同体成員の全員が「自分の割り前」を保証されている。この発想そのものが「受け付けられない」という人が増えてきた。

リバタリアンというのは、そういう考え方をする人たちです。²彼らによると、この世にあるすべての有用な資源は「フェアな競争」によって争奪されるべきものです。教育や医療はもちろん、ライフラインも森や湖も、「力のある個人が私有して当然だ」と考える人たちがいる。そのような価値の高いものについて、「それは、僕の取り分です」と手を出すだけで無償で手に入ると思っているのは、よほど「虫のいい」人間だ、というのがリバタリアンの考え方です。

自分たちの現在の地位や名声や資産は、自分の個人的努力の成果である。その「上前」を **A** 権力がはねて、自己努力の成果たる資源を貧者に **B** 分配することを、リバタリアンは認めません。それは私権の制限であり、私財産の奪取であるとみなします。才能もなく、努力もしなかった人々にも「社会的共通資本」が分配されることは、アソフエアである。分配を受ける人間は「他者の努力の成果のフリーライダー」であり、恥ずべき存在だと考える。

これは、アメリカの共和党の支持母体であるティーパーティーの考え方です。³このような特異な思想がアメリカにハッショウした^bことには、歴史的必然があります。これはアメリカの開拓時代のある種の通念を映し出しているからです。

アメリカではじめて公教育が導入されたとき、税金を投じて公立学校を作ることに多くの市民が反対しました。なぜ自分たちが刻 **C** 勉強して稼いで納めた税金で、自分たちほど努力してこなかった人間の子弟に教育機会を与えなければいけないのか。もし、教育を受けることで子供たちが知識や技術を身につけ、社会的上昇のチャンスを増すのだとすれば、⁴教育の受益者は教育を受けた子供たち自身である。だとすれば、その代価は自分で払うべきだ。価値あるものを無償で手に入れることはできない。教育を受けたければ、まず働いて、金を稼いで、それから学校に通えばいい。それがフェアネスというものだ、と。

そういうロジックで、十九世紀のアメリカの有産階級の人々は、公教育の導入に反対したのです。この理路は、現在のアメリカのリバタリアンの言い分とほとんど一言一句変わりません。

たしかにこの主張は、一見すると合理的です。でも、もしこのときに彼らの言い分に理ありとして、「学校教育の受益者は本人なのだから、公教育には税金を投じず、教育を受けたい人間は受益者負担すべきだ」というロジックが通つて、公立学校が作られなかったら、アメリカはそのあと政治活動を指導し、中産階級を形成して経済成長を支え、科学技術上のイノベーションを果たすことになった人材の多くを失い、二十一世紀の今もまだ、開拓時代とあまり変わらな

以後進国レベルにとどまっていたでしょう。

「フェアな競争」という言葉に、あまり簡単に頷くべきではありません。たしかに、それは短期的に見ると整合的なものに思えます。けれども、長期的なタイムスパンの中で見ると、集団の存続を土台から脅かすリスクを含んでいます。でも、そのリスクについては誰もアナウンスしない。成員みんなが「勝つものが総取りし、敗者には何もやらない」というルールで「フェアな競争」を続けていけば、そのような社会では、自己利益以外の価値、つまり公共的な価値、例えば「自然環境の保全」や「社会的インフラの整備」や、最終的には「国を護る」義務さえ人々は感じなくなるといふことに、想像が及ばない。

よく考えてください。勝者というのはあくまでも個人です。そして、個人の可動域は狭く、寿命もたかが知れています。「自分さえよければそれでいい」ということを原理に据えれば、自分以外の人間がどうなっても構わない、自分が知らない土地がどうであつても知らない、自分が死んだ「あとは野となれ山となれ」ということになる。論理的にはそうなります。

「フェアな競争」のピットフォールはそこにあります。同時代の競争相手からだけでなく、そもそも競争に参加していない人、できない人たちからもパイ⁵を奪ってしまふ。たとえ海洋を汚染し、大気を汚染し、森林を切り拓き、湖沼を枯渇させても、未来の世代がそれでどれほど苦しむことが予想されていても、「今、ここで競争に勝ちたい」と思っている人間には、誰も「やめろ」と言えません。「やめろ」という制止が効くためには、「勝者以外の人間にも地球上の資源の正当な分配に与る権利がある」ということについての社会的合意が必要です。

格差社会は「フェアな競争」という原理の上に成り立っています。でも、この原理を徹底させれば、人間社会はたぶん二、三代後には壊滅的な状態になるでしょう。

先ほどアメリカにおける公教育の例を挙げましたが、「フェアな競争」原理が徹底された社会には公教育がありません。医療保険もない。年金もない。むろん生活保護もありません。国有林というようなものもありません。市民なら誰でも入れる土地も海岸もありません。すべては「私有地」で、あらゆるところにNo Trespassing（立ち入り禁止）の看板が立っている。

僕たちが採用できるのは、せいぜい「競争の勝者であっても、その取り分の一部を競争の敗者（あるいは競争に参加しなかったものたち）のために割く義務がある。なぜなら、世の中には私有化になじまない共通の資源があるからである」という「常識的」なルールだけです。

どこまでが社会的共通資本で、どこからが私有に委ねてよいのか、その線引きについては計量的な議論がありうるでしょうけれど、「勝者の総取り」は認めないという原則については、社会的合意がないと困ります。

でも、こんな「当たり前のこと」を、今さらこうやって言葉を尽くして説かなければいけないというのは、ほんとうに恥づかしいことなのです。ロックやホブズやルソーが近代市民社会を基礎づけるために語ったことを、三〇〇年後にまた繰り返さなければいけないのですから。それは、人類は三〇〇年をかけてほとんど進歩しなかったということです。

もう一度言いますが、完全な格差社会というものは、一部地域で一定期間だけなら存立することができるでしょうし、そのような社会で「私はたいへん愉快に暮らしている」という人もそれなりの頭数はいるでしょうけれど、地球全域にわたって、長期に存立することはできません。

なぜなら、この資源分配競争には、その時代に生きている人しか参加できないからです。五輪の一〇〇メートル競走で金メダルが欲しければ、試合時間に試合会場にいなければいけません。その場にたどりつかなかった人間は、競争に参加できない。それが競争原理です。未来の世代はこの競争には参加できません。しかし、彼らがいない間に、競争のプレイヤーたちは使える資源を洗ひざらい引き出すことができるのです。

この共同体の未来の世代がどうなるのかについて何も考えない人たち、それが今の日本では「リアリスト」だと名乗っています。でも、未来を勘定に入れる習慣を持たない人たちを「リアリスト」と呼ぶことに、僕はどうしても同意することができないのです。

（内田樹『街場の共同体論』より・一部改）

語注

*ピットフォール (pitfall) 落とし穴。

問一 傍線部 a、c のカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えよ。

問二 傍線部 1 のような人たちはどのようなことをしない人たちだと言えるか。解答欄に合う形で、本文中から九字で抜き出して答えよ。

問三 傍線部 2 のような考え方が誤りであると言えるのはなぜか。次のように答えるとき、その空欄に入る言葉を本文中から十五字以上二十字以内で探し、その始めと終わりの五字を答えよ。
そのような考え方をすると、 の権利を奪ってしまうことになるから。

問四 空欄 A・B に入る漢字を次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア 国 イ 再 ウ 強 エ 等 オ 実 カ 差 キ 公 ク 総

問五 傍線部 3 「アメリカの開拓時代のある種の通念」はどのような考え方と言えるか。次の中から適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分の個人的利益以外の価値を認めない考え方である。
イ 原理的に格差社会を招来することになる考え方である。
ウ 短いタイムスパンで見える場合に成り立つ考え方である。
エ 必然的に公共的価値を無視することになる考え方である。
オ 寿命に限りがある個人だけが正当化できる考え方である。

問六 空欄 C に入る漢字一字を答えよ。

問七 傍線部 4 のような考え方は筆者によれば誤りである。では、公教育は何のために必要だと言えるか。解答欄に合う形で、本文中から五字で抜き出して答えよ。

問八 傍線部 5 「バイ」は具体的には何を指すか。次の中からその例として適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 公教育を受けられる機会
イ 大気や海洋などの自然資源
ウ 救急医療を受けられる権利
エ 科学技術上のイノベーション
オ 道路や電気などの社会的インフラ

問九 本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 社会における公的資源の管理運営には競争原理が関与してはならず、また、私念や私欲が介在してはならない。
イ 社会には私物化が認められない社会的共通資本が必要であるという常識は、現代において成り立たなくなりつつある。

ウ 社会的共通資本の領域と私有が認められる領域との線引きは、政治や経済に連動して決められてはならないものである。

エ リバタリアンやティーパーティーの特異な思想を徹底していくと、社会に医療保険、年金、生活保護は存在しなくなる。

オ 過去においてイギリスやフランスの思想家たちが説いた近代市民社会の基礎的理念は、いまだに人々に共有されていない。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

世の中になほいと心憂きものは、人に憎まれむ事こそあるべけれ。誰てふ物狂ひか、我人¹にぞ思はれむとは思はむ。されど自然に富仕へ所にも、親、はらからの中^Aにても、思はるる思はれぬがあるぞいとわびしきや。
²よき人の御ことはさらなり、下衆²などのほどにも、親などのかなしうする子は、目立て耳立てられて、いたはしうこそおほゆれ。見るかひあるはことわり、^aいかが思はざらむとおほゆ。^Bことなる事なきはまた、これをかなしと思ふらむ³は、親なればぞかしとあはれなり。

親にも、君にも、すべてうち語らふ人にも、人に思はれむばかりめでたき事はあらじ。

〔枕草子〕より

語注

※WEB公開にあたり、
著作権者の要請により出典追記しております。
新編日本古典文学全集18「枕草子」による

*物狂ひ ここでは「変人」のこと。

*はらから 兄弟姉妹。

*下衆 身分の低い者。

*君 ここでは「主君」のこと。

問一 二重傍線部 a・b の意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えよ。

- a ア まっぴらだ イ もっともだ ウ 注意が必要だ エ 仕方ない
 b ア いとしい イ かなしい ウ たよりない エ せつない

問二 波線部 A・B の後にはそれぞれ省略が想定できる。省略された言葉として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えよ。

- A ア 人 イ 親 ウ はらから エ 事
 B ア よき人 イ 下衆 ウ 親 エ 子

問三 傍線部 1 の解釈として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- A 人に憎まれるはずはない
 イ 人に憎まれると思っている
 ウ 人に憎まれようとは思っていない
 エ 人に憎まれないようにしようと思っているのか

問四 傍線部 2 の解釈として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- A 上品な人については一層である
 イ 優秀な人に関してはまだ白紙だ
 ウ 高貴な人についてはいうまでもない
 エ 人格の優れた人なら入念にするはずだ

問五 傍線部 3 の「親なれば」と「ぞかし」の間に入るべき内容として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- A いたはしうおほゆ イ 見るかひある ウ ことなる事なき エ かなしと思ふ

問六 本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- A 人から憎まれるのは辛いことである。
 イ 変人というのはどこでも嫌われてしまうものだ。
 ウ 肉親の中にも好きな人とそうでない人がいるものだ。
 エ どんな人からであっても、好意を持たれるのはいいものだ。
 オ 親というものは、それほど優れていない子でもかわいいものだ。

国語解答用紙

(注意) 受験番号・氏名は下の二つの欄に記入すること。
解答は右に指定された欄に書くこと。

<R03152061>

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

<R03152061>

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

国語採点欄

		三			
問五	問三	問二	問一	問八	
		A	a		
問六	問四	B	b	問九	

折り線

		二			
問七	問五	問四	問三	問二	問一
		A	始め		a
	問六	B			b
			終わり		c
				こと	ね

		一						
問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
								a
問十								b
								c